

映画の力

映画「野球部員、演劇の舞台に立つ！～甲子園まで642キロ～」を支援する会 事務局長 平井靖文（農業）

近年、映画業界が元気ですが、そんな中、農業・農村をテーマにした映画も数多く製作されています。印象深い作品は、徳島県上勝町で、70～80代の女性を中心となって葉っぱを料理のつまものとして販売し、2億6,000万円の売上高をあげるビジネスとして成功させた実話を映画化した「人生、いろどり」(2012年)や、絶対に不可能と言われた無農薬リンゴの栽培に成功した青森の農家・木村秋則氏の実話を映画化した「奇跡のリンゴ」(2013年)などです。また、大阪の小学校6年生のクラスで、食べることを前提として1年間大切に育ててきたブタを食べるかどうかで大論争を巻き起こす子どもたちを描いた「ブタがいた教室」(2008年)も秀作でした。

私は3年前に35年勤務したJAを退職し、現在は福岡県八女市で茶と水稻を栽培している農業者です。昔から映画が好きで今でもよく映画館に通っていますが、最近は観るだけでなく映画の製作に何らかの形で関わることができないかと常々考えていました。

そんな時、地元、八女市のとある高校での実話の映画化の話が持ち上がり、映画「野球部員、演劇の舞台に立つ！～甲子園まで642キロ～」が八女市を舞台に製作されることになりました。縁あってこの映画の製作をお手伝いすることになり、地元で「映画を支援する会」を発足させて、八女発の映画の成功に向けて現在活動を行っております。

この映画は、野球名門高校の野球部員が、あ

と一歩で甲子園出場を果たせない壁を打ち破るため、野球部員が演劇部を掛け持ちするという前代未聞の話で、若者たちのほとぼしる汗と熱い息づかいが聞こえてくる青春群像劇です。この映画の話は初めて聞いたのは3年前で、当時は物語の大筋は決まっていたものの、登場人物の設定など細かな点はまだ決まっていない状態でした。そこで、八女はお茶、イチゴ、電照菊をはじめ、農業がとても盛んな地区なので、登場人物の実家は農家にしたらどうでしょうか、と提案をしました。その提案にプロデューサーが大いに賛同してくれて、中心的な人物である青年はイチゴ農家、ヒロインの女子高生は電照菊農家の設定となり、また、野球部員たちが茶畑や果樹園を走るシーンが取り入れられることになりました。映画は本年3月～4月のロケーション、夏以降完成の予定です。

現在は、映画やテレビドラマなどの撮影を誘致するいわゆる「フィルム・コミッション」組織が全国にあり、それぞれ誘致活動を行っています。八女地域には自然豊かな風景や風情が数多くあり、映画やテレビドラマなどのロケには非常に適しています。今回の映画製作を契機に、八女でも「フィルム・コミッション」を設立し、自然、文化、特産品など八女の魅力を全国に情報発信し、地域の活性化につなげていきたいと思っています。

(ひらい やすふみ)